

Darkness Dimension

可憐なヒロイン達が
オーク、魔物に蹂躞しまくり
快樂と幸福に墮ちるCG集



突如行方不明となったベルを探すため、
ヘステイアは“裏の情報屋”と呼ばれる、
とあるファミリアを訪れベルの居場所を聞き出した。

しかし莫大な情報量を請求され、

支払不可能と判断されるとその小さな体で支払うよう請求される……

自身の唯一のファミリアであり、

大切なパートナーでもあるベルのため、

ヘステイアは覚悟を決めて身体を差し出した。

「ふひひっ、あのへスティアたんを抱くことができるなんて〜」
「ううっ、ボクが、こんなこと……!」

ベッドに横たわるや否や、

おじさんの大きくて太い肉棒がへスティアの膣口へとあてがわれた。

「んんっ!」

「ほらほら、ぼくのおチンチンが入っちゃうよ〜!」

そのままゆっくり狭い入口へとおじさんのモノが侵入してくる……

「あっ……いやっ……!」

ズツ



「ひぐっ？！」

おじさんは遠慮なくヘスティアの膣奥へ肉棒を二気に突っ込んだ。
今まで感じたことのない感覚に、ヘスティアは思わず目を見開いた。

「ふひっ！ヘスティアさんの中狭くて最高だよお！」

「ま、待って……！！！」

「ふふ、ヘスティアさんのこゝ、なんかヌルヌルしてきたぞ〜？」

肉棒を一番深いところに挿入されたままグリグリと刺激され、
身体は勝手に反応して愛液を分泌させた。

ズパン

愛液が潤滑剤となり、それをいいことにおじさんは腰を振りだした。

「んんっ！あっ！！ボクは、神様なのにつ！んん！！」

「あ！！へスティアたんの中最高だよ！」

あっ

んっ

容赦なく襲いかかる未知の快樂に戸惑いつつ、

ただベルのことだけを想いその感覚に必死に抗うへスティア。

「へスティアたんも可愛い声出てきたね！」

「そんなわけ……！んっ、あるもんか！ああっ、ん！！」

パン

パン

パン

パン

おじさんの先走りと愛液が混ざり狭い室内には淫猥な匂いが漂い、
感覚を狂わせた。

行為は更に激しくなる一方だった。

んんんっ！激しいっ……！あっ、あっ！んあ……！

「ああ、ヘステイアたん、最高だよ！

おっぱいもそんなに揺らして！」

おじさんの動きに合わせてヘステイアの

豊満な胸も淫らに揺れた。

「ヘステイアたん……ハアツ、ハアツ、

もっと気持ちよくしてあげるからね……！」

「ああ……！ホ、ボク、別に気持ちよくなんか……！

気づけば、いつの間にか淫らな声を出し、

表情もだらしのないものへと変化していた。

んっ

パンパン

パンパン

「ああっ！へステティアたん！出すよー！」

「えっ、ちょっと待って！中は駄目だよー！」

へステティアの願望も虚しく、

おじさんは彼女の身体をしっかりと抱きしめて
更に激しく腰を振った。

「ああ！イク！イクよ！へステティアたん……！」

「いやっ！いやあー！」

どくん
どくん

悲鳴と共に、ドブ、ドブツ、
と膣奥に大量の精液が流し込まれる。

「ああ……そんな……」

絶望した表情を浮かべるへステティア。

結合部からは膣内に入りきらなかった大量の精液が溢れ出てくる。

ビュル
ビュル

ビュル

「ふひひ、最高だったよ、へステイアたん」

「うう、ベル君……ボクは、ボクは……汚れてしまったよ……」

その瞳から零れ落ちる涙は、

行為の途中から感じていた快楽に対するものだった。

「またいつでも抱いてあげるからね……!」

「……いま、行くからね、ベル君……」

行方不明となったベルが向かった先の情報を得たへステイアは、
一人未知の迷宮へと向かう決意をした。



『んんっ!! 離せ!! 離せつたら!!』

ただベルのことだけを想い一人で迷宮に挑んだヘステイア。

しかし待ち構えていたのは強力なモンスターたちだった。

下界で使える神の力には制限がある。

ヘステイアはあつという間に植物型のモンスター

に捕食されてしまった。

「やつ……こんな格好させて、

一体どうするつもりなんだ……!」

服はボロボロに引き裂かれほとんど裸にされてしまい、
触手に両手両足を拘束された。

「ま、まさかボクを苗床にするつもりじゃ……!」
嫌な予感を感じつつ、ヘステイアは必死に抵抗する……。

ぬっるん
ぬっるん



へステイアの嫌な予感は的中し、モンスターの生殖器であろう二本の触手が、彼女の視界に入った。

「ひゅっ……ひゅっ……」

人の男性の生殖器と酷似したそれは苗床とする穴を探し求めるかのように空中を彷徨う。

「いやだ……やめろったら……!」

果たして植物型モンスターに言語は通じているのかどうか。

へステイアの悲鳴を楽しむかのように生殖器を見せつけながら、ゆっくりと彼女の秘部へと近づいていった。



必死に抵抗するも、露わにされたお尻がふるふると震えるだけで、抵抗すればするほど触手が四肢を拘束する力は強くなった。

「びゃっ……いやあ……」

ついには生殖器の触手がヘステアの秘部へとあてがわれ、一気に挿入された。

「んっ……ああっ……」

ヌルヌルとした粘液を纏った触手は、すんなりと彼女の膣内へと侵入し、子宮口まで届けばグリグリと刺激を与えてくる。

「やっ奥っ……んん……だめ、ああっ……」

身体を拘束していた触手もずるずると這いずるように動き、全身へ快楽を感じさせた。

「んっ……ああっ……だめっ、くすぐったい……んんっ……あっ……ああっ……」

ギョッ
ギョッ

ズ



「もう許して……」

ヘステイアが、膣の奥深くまで挿入された結合部を見て涙を流していると、突然視界が真っ暗になる。

「えっ?! な、なにこれ?!」

触手によって目隠しされ、突然の出来事に混乱するヘステイア。

ズツ
ズツ

しかし触手は彼女の反応を楽しんでいるかのように、今までとは違う動きをします。

「んんっ!! そんなっ、ああっ!!」

胸、お尻、太ももと全身を撫でまわすように、ゆっくりと身体中を触手が這いずりまわる。

視覚を奪われたことにより触覚が敏感になり、触手が少し動いただけでヘステイアはあられもない声をあげた。

触手は膣へのピストン運動を更に激しくし、彼女の抵抗する力をどんどん奪っていった。

「あっ、あっ、もう、やめて……！」

彼女からは見えないが、もう一本の触手が現れ、彼女のお尻の穴へと先端部分をあてがった。

「えっ、なっ……そこはちがつ……ひぎい……！」

触手は容赦なく彼女のお尻の穴も貫いた。

「いやあああ……んんっ……なに、これえ……！」

初めての感覚に軽いパニックを起こすヘステイア。そんな彼女の悲鳴を遮るかのように、更にもう一本の触手が彼女の口内へと侵入した。

「んぐうっ……んんっ……んんっ……！」

穴という穴すべてを蹂躪され、そんな状況でも快楽を感じている自分の身体に彼女は戸惑った。

（なに、これ……気持ちよすぎるよ……！）

だめ……こんなモンスター相手に……ああ……でも……！



触手の動きは更に激しくなり、彼女の性感帯すべてを刺激した。

「んんっーんんっーんんんっー」

自分の身体をモンスターにどんどん開発されて、

そこにあるのは嫌悪感だけのはずなのに、

どこか満たされていく感覚を覚えるヘステイア。

「ああ……だめ、気持ちいい……こんなの、だめなのに……」

ギョッ

瞳、尻、口を犯していた触手が激しく震えだす。

彼女は本能的にモンスターの絶頂が近いことを悟った。

「んんっーらめっーんんっーんんんん……」

ドクッ
ドクッ
ドクッ

そして彼女自身も、身体の奥底から何かが湧き上がってくるのを感じた。

「だめっ、触手に犯されて、ボク……イツちゃう……」

触手の先端が二気に膨れ上がり、彼女の三つの穴に大量の粘液を放出した。

ギョッ

「んんっーんんっー……」

そして彼女もビクンビクンと身体を痙攣させ、絶頂を迎えてしまう。

触手が引き抜かれると、自分の口、膣、お尻からは
モンスターがコポコポと大量に溢れ出てくる。
ようやく解放され、虚ろな瞳でそれを見つめるヘスティア。

「ハア……ハア……誰か、助けて……」

モンスターは満足したのか、
四肢の拘束も外せば彼女を捕食器から吐きだし、
ダンジョンのど真ん中へ放置した。

ギョツ

ギョツ

ギョツ

ハア
ハア

「うう……ベル……君……」

大好きな人の名前を呟いて、彼女は更にダンジョンの奥へと進む。

ギョツ

ダンジョンの更に奥深くで待ち構えていたのは大きなゴリラ型モンスターだった。

そんな筋骨隆々のモンスターに力で叶うはずもなく、ヘスティアは簡単に組み伏せられてしまう。

「ぐっ……は、離せ……！」

ゴリラは彼女の薄い服装に発情したのか、鼻息を荒くして彼女の衣服をはだけさせれば、規格外のサイズの肉棒を二気に彼女の膣へと挿入した。

「ひっ……なにを……んぐう……！」
興奮したゴリラの肉棒は既に大きく、堅くなっており、彼女の子宮までも犯した。



ゴリラは雄叫びをあげるとそのまま腰を振り始める。

「ひぎっ……んんんっ……おっきい……んんんっ……」

お腹まで響くような激しいピストンに悲鳴をあげつつも、身体は正直に反応した。

「んんっ！だめだよ、そんな、激しく……！」

突かれるたびに膣がキュウキュウに締まり、

ゴリラは満足げな表情を浮かべると更に激しく腰を振りだした。

パン

パン

ズパン

「あああっ……！それ、だめえ……！んんんっ……！あんっ……！」
その声は既に悲鳴ではなく、嬌声に近いものだった。



『もうだめ！イク！イっちゃう！！んああああつ！！！！』

へスティアの嬌声と共にゴリラが雄叫びをあげ、彼女の膣内に射精する。

「んんっ……！……中につ、中に入っでける……！……モンスターの精子が、ボクの中に……！」

ゴリラの射精量とその勢いは凄まじく、彼女の膣内にはとても収まりきららずに逆流して彼女の下半身を汚していく。



「んああ……！……こんなに、たくさん……！……んん、だめ！！んんんっ……！」

身体をビクビクと震わせながら膣奥でゴリラの精液を受け止めるが、収まる気配がまったくなく、ゴリラはそのまま腰を振り続けた……

「あぁっ……だめえ……休ませてよ……あぁっ……
気持ちいいっ……いったばかりなのに……!」

ゴリラは射精を続けながら彼女の子宮口を容赦なく突き続け、
終わりのない快楽を彼女に与えた。

「んんっ……あぁっ……しゅごい!! また、イクぅ……!」

止まることのないゴリラの射精を、彼女は夢中になって受け止めた。
だらしなく口を開いて、気づけば自分から腰を振っていた。

「もっとお……もっと頂戴い……!」

彼女の言葉に応えるかのように、ゴリラは射精しながら腰を振る。

「あぁっ……気持ちいいっ……もっと、もっとお……!」

ビュル

ビュル

ズツ



やがてゴリラの射精が落ち着いてくると、
彼女は息を切らしながら幸せそうな笑みを浮かべた。

「あはは……気持ちいい……ごめん……ベル君……ボク、もう……」

最後の射精を終え、ゴリラは満足そうに喉をグルグルと鳴らせば、
彼女を放置してダンジョンの奥深くへと去って行った。

ビュル

「ハア、ハア……モンスターとのセックス……くせになりそう♡」

下半身をモンスターの精液でどろどろにしながら、彼女は呟いた。
そこにはもう神の威厳などを見る影もなかった……

はっ

はっ

ギョツ
ギョツ



「あんっ、もう、そんなにがつついちゃ駄目だよ♡」

ダンジョンの更に奥深く。ヘステティアは発情した犬のモンスターに襲われていた。

はっ

はっ

しかし彼女の表情には苦しさを悔しさはなく、

これからモンスターにされるであろうことに期待した表情しかなかった。

壁につき、背後から犬のモンスターが乗っかってくる。

彼女はお尻を振りながら荒い息をあげた。

「んっんっんよ♡挿れてえ……」

「んんん♡きたああああ♡」

犬のモンスターの堅くなった肉棒が挿入されると、ヘスティアはだらしのない声で喘いだ。

「んんっ！モンスターのちんちん気持ちいいよお！！」

すっかり快楽に支配されてしまった彼女は自ら腰を振り、モンスターにも腰を振るよう促す。

「足りないもつと、もつとおー」

ズツ

更には自分から壁へ豊満な胸を押し付け、乳首を擦りつけて快楽を貪る。
「んあーあー！ボク、変態になっちゃったよお♡」

ぱー

その様子はセックスというよりも交尾だったが、ヘスティアは満足げな笑みを浮かべて刺激を求めた。
「んんっ♡気持ちいいっ!!—もっど、もっど頂戴!!—」

あ モンスターも鼻息を荒くして本能のまま、彼女の膣壺に肉棒を突き立てた。
「ああっ!!もう、もうイっちゃいそうなの!!—もっど、もっどシてえ♡」

既にこのダンジョンへと来た目的のことなど彼女はすっかり忘れてしまっていた。
人外の肉棒を突っ込まれながら、はしたなく口からよだれを垂らして喘ぐヘスティア。



んっ

ズッ

ズッ

ズッ

ヘステイアを犯しているモンスターがグルルと唸る。

「あつー！あんっ……！イキそうなの？……だして！」

ボクの中にたくさん、モンスターの精子だしてえ♡」

モンスターから精を搾り取るかのように、ヘステイアは膣をキュウキュウに締め付け、より激しく自分から腰を振った。

「イクッ！イクッ！ボクもイクから……中に♡中に遠慮なく出して……！」

彼女のその声と同時に、モンスターが吠える。

「イク！イク！くううううう……！」

人のものとは大きく異なる精液を膣奥に注ぎ込まれ、絶頂を迎えるヘステイア。

ギョツ

ドグツ
ドグツ

ズ
パ

どくん
どくん

ドグツ
ドグツ

「あは……あはは……気持ちいい……セックス、気持ちいいよお……♡」
絶頂の余韻に浸りながら、ヘステイアは淫らな表情で呟いた。

「ハァ……ハァ……♡ボク、セックスさえできればもう何もいらぬ……♡」

疲労からか、その場に膝を落として下半身から流れるモンスターの精液をうつつりと見つめていた。

「だめえ……まだ足りないよお……もっと、ボクを満たしてくれるモンスター……」

虚ろな瞳で、相手になってくれるモンスターを求めて、彼女はダンジョンの奥へと進む……

ぬによ

「えへへっいいよ……ボクの身体、君の自由に使って♡」

ダンジョンの最奥で、先のゴリラ型モンスターと再会したヘステイア。彼女は躊躇なく衣服を脱ぎ捨てるとゴリラの上に跨った。

「んんん♡おちんちんちようだい♡」

再び見えた規格外のサイズの肉棒を見て、彼女は満足げな声であげる。

「んんっ♡胸をそんなに強く揉んだら形変わっちゃうよお♡」

ゴツゴツとした大きな掌が、彼女の胸を鷲掴みにする。

「はやくはやく挿れてよお♡」



「んんぐっ……あああつ……やっぱり大きい♡」

ゴリラの肉棒がゆっくりと挿入されていく。

既に大量の愛液で濡れていた彼女の膣はゴリラの大きい肉棒をすんなりと受け入れていった。

ギ
ギ
ギ

「んあつ♡気持ちいい♡あつ♡胸っ♡」

ゴリゴリと膣内を抉られるような感覚も彼女にとっては心地いいものだった。

（こんなの、ボクもう戻れないよ♡）



ゴリラの肉棒が子宮口まで届くと彼女はうっとりとした笑みを浮かべてモンスターの顔を見た。
「んんっ♡ 気持ちいいのっ♡ ねえ、君も気持ちよくなって？」

ギョッ
ギョッ

異常な快楽は、彼女の思考も麻痺させる。

「ねえ、気持ちいい？ポクの中、気持ちいいかい？」

まるで愛する人に囁くかのような声で、ヘステイアは言った。

ゴリラはそれに応えるかのように低く唸ると大きく腰を振りだした。



「ああっ！気持ちいいっ！...これ、好きっ、好きだよ♡」

下から突き上げられる感覚は、前回の交尾とはまた別の快楽があった。

「んんっ、すごい！...これ、気持ちいい♡」

彼女は愛おしそうにゴリラを見つめながら、相手の動きに合わせて自分から腰を振る。

（ああっ、気持ちいい、セックスがこんなに気持ちのいいものだなんて知らなかったよ♡）

耳に当たるゴリラの鼻息ですら、彼女にとっては心地いいものとなっていた。

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

行為の激しさは増す二方だった。

彼女の小さい身体をしっかりと抱えて、ゴリラは更に激しく腰を彼女のお尻に叩き付けた。
「んんっ♡ 子宮の中までっ♡ 挟られてるっ♡」
(気持ちよすぎて、もうセックス以外考えられないよお♡)

一人と二匹は荒い息を漏らしながらただひたすら快楽に溺れた。
「そっっっっっっもっくとたくさん突いてっっっっんんっっっっあんっっ♡」

ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ

「あっ♡あっ♡んんっ…！好きっ、大好きだよっ♡」

いつしかヘステイアはゴリラ型のモンスターに対して愛情を抱き、行為に溺れていた。

「ねえっ、キス♡キスして♡」

ゴリラのほうへと顔を向け、だらしなく口を開いて舌を出した。

「たくさん、ボクとキスしてほしいんだっ♡」

ゴリラはその言葉を理解したのか、それとも本能的に感じ取ったのか、荒い鼻息のまま口を開いた。

ズツ

ズツ

ズツ

ズツ

ズツ

ズツ

ズツ



ちゅっ……ちゅば、ちゅる、れる……♡
舌と舌が絡み合う音が響き渡る。

「んっんっ、んっ♡」

へスティアは幸せそうに笑顔を浮かべて必死に相手の舌に自分の舌を絡めた。

んっ

（ああ……キスしながらのセックスがこんなに気持ちいいなんて♡これも癖になっちゃうよお♡）

下から突き上げられる肉棒の勢いは変わらず彼女に快楽を注ぎ込む。

「んっんっ！ポクッ、キスしながらイっちゃうよお♡ んっんっ♡」

ズッ
ズッ
ズッ

ズッ
ズッ
ズッ



「あっ！きて♡ポクも、もうイク！一緒に、一緒にっ♡
んああっ！キスしながらイク！イクっううう！」

ビュルッ！ビュルルッ！
へスティアの嬌声、ゴリラの雄叫びと共に、
彼女の膣内に大量の精液が注ぎ込まれる。

「んっ！出てるっ！こんなにたくさん！んっ！んっ！んっ！」
中に出されたことに幸せを感じながら彼女は再びゴリラの舌に自身の舌を絡ませた。

ちゅ、ちゅばっ、れる、ちゆる♡

（ポク、モンスターとキスしながらセックスしちゃった♡
しようがないじゃないか♡こんなに気持ちいいんだもん♡）

ギョッ

ビュッ
ビュッ
ビュッ



「はあっ♡はっ♡ボク、幸せだよ♡」

自分を愛してくれたモンスターに耳元で囁いて、ヘスティアは微笑んだ。

「えっ？まだするのかい？……ふふっ、しょうがないな♡」

小さな身体をモンスターに預けたまま、彼女はモンスターの胸に頬を擦りつけた。

はっ♡

はっ♡

はっ♡

「次もちゃんと気持ちよくしてくれなきゃ嫌だよ♡」

淫猥な性行為に溺れた女神は、暗いダンジョンの奥深くで、延々と快樂に溺れ続けた……。

END

薙切えりなが眠りから覚めると、そこは暗く、狭いどこかの地下で、周囲は鉄格子に囲まれており、目の前には数人の男たちがいた。

「なっ……あなたたち、これはいったいどういうことかしら」
「ふふ、まさかこんなところにあの薙切えりなちゃんが迷い込んで来てくれるなんて」

男の一人がえりなに飛びかかる。

「っ！やめなさい！いやっ……！！」

「いやっー離さない！汚い手で私に触らないで！」

「ふふ、捕まえたぞお……」

はっ

男はえりなの制服をすべて剥ぎ取り、
その重い脂ぎった肉体を彼女の上にかぶせた。

「いやっ……この男、臭い……最低だわ、こんな奴に……」

「えりなちゃん……ふふ、いい匂いだあ……」

「こんなことして、ただで済むと思ってるのかしら？離さない！」

必死に抵抗するえりな。しかし男の力には敵わず、
足をバタバタと暴れさせるくらいしかできなかった。

「今から僕のソーセージで、たあっぷり料理してあげるからねえ！」

「ひっ……やめなさい！今すぐその汚いものをしまいなさい！」

男はえりなの秘所に肉棒をあてがうと、焦らすように擦りつけた。

「んんっ……やめて……！」
力の限り抵抗するえりな。

「ほら、ほら、入っちゃうよお！」

「くっ、んんっ……私は絶対にお前たちを許さない！」

ぱんぱん

男はえりなの秘所にあてがった肉棒を二気に突っ込んだ。

「ひっぎい！いい、いたっ……んんぐっ！」

「ふふっ！えりなちゃんの処女いただき！」

（何……これ、痛い、痛すぎる……そんな……この私が、
こんな汚い男に……）

破瓜の痛みに耐えるのに必死で抵抗をやめるえりな。

ギョッ
ギョッ

「えりなちゃんのお嬢様マ○コギョウギョウで気持ちいいよー！」

「うあ……あ……んぐっ……」

ぱんぱん

「あぁっ、気持ちいいよ、えりなちゃん……」
「あぁんっ！やめ……やめなさい！んんっ、んっ！汚らわしいッ！」
時間が経つにつれて破瓜の痛みは和らぎ、
また別の感覚がえりなを襲った。

「ふふ、その汚い男に犯されて、こんなに濡らしてるのはどの誰かなあ？」
「なっ……それはッ！」

えりなの身体は男の肉棒に勝手に反応し、愛液を分泌する。
嘘よ……この私が、こんな男に犯されて……生理現象……
そう、これはただ生理現象よ……

パン

「んん〜もう、イクよ、えりなちゃん！」

「えりなちゃんの中にたっぷり出してあげるからね！」

「僕のミルク、えりなちゃんの下のお口でじっくり味わってね！」

「ひっ………そんな、中は、中はやめなさい……！」

「えりなの叫びも虚しく、」

「男は遠慮なく大量の精液をえりなの中に注いだ。」

「いやっ………こんな品のない汚らしい男に……」

「お、犯されて……中出しまでされてしまうなんて……」

「ああ………えりなちゃんの処女マ○コに中出ししてるよお……！」

「もう……いやあ……」

ピル
ユル

パ

男はたっぷり射精した肉棒をねちっこくえりなの膣壺から引き抜いた。
「んあつーああん……」

「あれれ？えりなちゃんもしかして感じちゃったのかな？」

「だ、誰が！こんなの汚らわしいだけですわ！」

「ふふ、安心してよえりなちゃん。」

「たったこれだけで終わりなんてことにはしないからさあ」

男が不気味に笑った。

ギョッ

ギョッ



「そんなっ！二人同時になんて、無理ですわ！」
えりなは身体を起こされ、手枷によって身体の自由を奪われた。

先ほどの男とは別の男が二人、

下品な笑みを浮かべながら彼女をサンドイッチするように近づいて身体を密着させ、

えりなの頬、首筋、胸、背筋を舌で舐めまわした。

く、臭い……もうこんな男たちの相手なんかしたくないのに……っ！

「んんうー！ああん！やめなさい！んんんーっ！」

「ぶふ、せつかくだからえりなちゃんのこっちの処女も貰っちゃおうね」

（え？そこは、お尻？なんてことを……！）

「んっ！あっ！ひぎっ！ああん！」

男たちは容赦なくえりなの二穴へ肉棒を挿入し、腰を振った。

パン
パン
パン

「あん！ああん！だめ、だめですわ！んんっ！」

「えりなちゃん、さつきよりずっと感じてるねえ。これは淫乱の素質があるんじゃないかな？」

「そんな……！私が、淫乱ですって……？ふざけたことを！ああっ……でも、この感覚は……♡」

強制的に与えられる感覚の変化に、彼女はすぐに気づく。

（私が……この私が、見知らぬ男に犯されて、感じてしまっているなんて……認めたくない……、認めたくないけどお♡）

「ほいらえりなちゃん、望み通り、もっと激しく犯してあげるからね」

「あっ！あっ！んんっ！んあ！私はっ、そんなこと、望んでなどいませんわ！んんんズッ♡」

男たちが激しく腰を振るたびに、彼女の綺麗なブロンド色の髪が揺れる。

「はあ〜……えりなちゃん本当いい匂いだねえ」

「あなたなんかには褒められても嫌悪感を感じるだけよ！んんっ！んあ！」

「えりなちゃん！ぼ、僕もう……！」

「いやっ……また中はいや！やめてええ！」

パン
パン
パン
パン

パン
パン

ズッ
ズッ
ズッ
ズッ



『いやあああああ！』

男たちは二斉にえりなの膣奥、尻穴へと射精した。

（いやあ！お腹の底に、熱くて、気持ち悪いものが！どうして……私がこんな目に……）

『えりなちゃんの下のお口はおいしそうに僕らのミルクを飲んでるよお〜』

射精はなかなか終わらず、精液を出し続けながらも男たちはえりなの二穴を刺激した。

『んんんっ！動かさないでください！ああっ！もう、気は済んだでしょう！』

どくん
どくん

ビュル
ビュル

やっと男たちの射精が終わることにはえりなは困憊しきっていた。

（ああ……これでやっと解放される……）

ギュッ
ギュッ

男たちは射精の余韻に浸りつつ、

精液を彼女の二穴に擦り込ませるかのようにぐりぐりと奥を刺激してから肉棒を引き抜いた。
「んんあーあんーんん……も、もう満足でしょう……早く私を……」

「解放してあげてもいいけど、えりなちゃんこごだかわかっているのかなあ？」

男たちはニヤニヤと笑いながらえりなの手枷を外して解放した。

「ぶふっ、いつ戻ってきてもいいからねえ。またたくさん気持ちよくしてあげるから」

男たちの不気味な表情が、えりなの脳裏に焼き付いた。

ドグッ

ドグッ
ドグッ



解放されたえりなは出口を求めて彷徨った。

しかしそこは、迷宮のように地形が入り組んでいて、出口のようなものは何一つなかった。

ぬに。

知らず知らずのうちに迷宮のどンドン奥へと進んでいったえりなは、
そこでこの世のものとは思えない異形のモンスターと遭遇した。

パニック状態になったえりなはそのままモンスターに捕食……ぱっくりと食べられてしまった。

(い、生きてる……？でもく……苦しい……)

全身を包み込まれ、身体を動かす余裕もなかった。

ぬに。

「ひっ、気持ち悪い！これはいつたいなんですか？！」

捕食されて間もなく、えりなは全身を這いずりまわるヌルヌルとした感触に気が付いた。

それはモンスターの捕食器内の壁に無数に生えた触手だった。

触手はえりなの豊富な胸を器用に探し求めると、胸を包み込んで揉みだす。

ぬによ

「んっ！なににつ……！どうして、胸を！ああん！」

ありえない体験に思考が追いつかなくなるも、身体中を愛撫してくる触手の感触に、えりなは戸惑った。

ぬによ

「んんっ……いったい、なにがどうなって……あっ、んんっ……」

全身を包み込む触手の天井から、ドロドロとした液体が放出される。

ぬによ

「……これは、まさか消化液？！ああ……私は、このままここで溶かされて……」
えりなの脳裏に死がよぎる。ドロドロとした液体は顔を伝い、全身へと流れ落ちる。

「……これは……」

回内へも入ってしまった謎の液体に、えりなの身体がビクンと跳ね上がった。

「この蜂蜜でも水飴でもない、濃厚な甘さと香り……」

「こんな美味な蜜が、この世に存在していたなんて……ああ、もっと欲しい、もっと飲みたい……」

ぬによ

せめて死ぬ前に……と、えりなは天井から零れ落ちてくる蜜を夢中で飲み込んだ。

(飲めば飲むほど癖になる……それに身体が、なんだか熱い……!)

ぬによ

「う……んんっ……あああん!!なに、これえ!!身体がつ!!」

触手が胸、お腹、背中、太もも、お尻を二撫でするだけで、全身に快楽の電流が走る。

「んんっ!!この蜜っ……まさか……媚薬?!」

気づいた時には、彼女はその媚薬である蜜を大量に浴び、そして飲み込んでいた。

そして二際大きい触手が足ももから太ももにかけて這いずりあがってくるのを彼女は感じた。

「ああっ!!だめっ、んんん!!」

ぬによ

触手はそのまま彼女の秘部へと向かい、その先端を膣口へと押し付けた。

(ま、まさか、私この触手に……!)

——ズプッ

「んんんっ！は入って……私の中に、化け物の触手がっ！」

敏感になった全身の愛撫によって既に濡れていたえりなの膣内はすんなりと触手を受け入れた。

ぬに

ズッ

「いやっ！なにこれ！こんなのでっ！ああん！んっ♡んっ♡き、気持ちよすぎる……！」

よ

ぬい

感覚から相当な大きさのものを挿入されているというのは理解できたが、自分の身体がそれを受けてすぐにオーガズムに達してしまいそうなくらい感じてしまっていることに驚いた。

「びっ、んんんんっ！」

挿入された触手はえりなの子宮口まで達すると大きく左右に、振動するようにならねりだした。

ぬによ

「あああつ♡それ、だめえつ♡そんなにされたら私、私……っ！んあああああつ！」

捕食された触手の壁の中で、彼女は全身を痙攣させながら絶頂を迎えた。

ぬっるん

「んあ……はあつ♡はあつ♡」

しかし触手は休むことなく彼女の膣壺を犯しつづけた。

ぬによ

ぬっるん

「んんんんっ♡あはあ、だめ、だめなのお！」

井

「ひっ?！」

左右にうねる触手が引き抜かれたかと思えば、

入れ替わりに今度は更に二回り大きい触手が膣口へとあてがわれた。

ぬい

「あつ、ま、待って、そんなの、入るわけ……ひぎいい!!」

普通なら裂けてしまいそうなくらい大きな触手なのに、

先ほどの触手のせいで広がった彼女の膣内はその大きさの触手ですら受け入れてしまう

(いや、こんなので犯されつづけたら私、おかしくなってしまうすわ!!)

ぬによ

ズ
パ
ン

「いやあ、太い触手が、私の中を激しく出入りして……！ああんっ♡もう、

こんな耐えられるはずが……」

触手はえりなの子宮口まで押し広げ、子宮の奥まで犯し尽くす。

「ひっ！んんっ！んんあ！ああん！あつ！……みんなの、気持ちよすぎてえ♡あつ、あつ！ああん！！」

今まで感じたことのない子宮を犯される快樂と、

全身をヌルヌルとした触手で愛撫される快樂がミックスされ、

彼女の凜々しかった表情はだらしない表情へと変わっていった。

「あんっ♡もう、私、また、またイってしまいます！ああつ！化け物に犯されて！私っ！！」

ぱんぱんぱんぱん

「ああんっ、イク、イク、イク、イクううううう！」

によ

全身をビクビクと震わせて、えりなが絶頂を迎えたのとほぼ同時に、
彼女の子宮内まで犯す触手が二気に膨れ上がった。

（んんんっ！まさか、私の中に、中にい！）

触手は彼女の予想を裏切らず、子宮の中に大量の子種を流し込んだ。

ジュル
ジュル

「あああ……化け物に中だしされながら、またイクうう！」

あまりの量と勢い、そして熱に、彼女は再度オーガズムに達した。

（ああ……気持ちいい……私の身体、すっかりおかしくなってしまうました……）

迷宮の中で投げ捨てられていた彼女を拾ったのは、

緑色の肌の、三足歩行する豚のようなモンスター……オークだった。

「ラヒツ、久シブリノ、女……」

オークはえりなを自分の巢へ連れ帰るや否や、

彼女を床に寝かし、肉棒を彼女の秘部へと押し付けた。

「オマエ、イイ身体シテル、オデ達ノ、子供、産メ」

ズツ

「んんっ……！化け物の子供なんて、死んでもごめんですわ！」

「オマエノ、ココハ、正直ダゾ」

ギョツ
ギョツ

オークは鼻息を荒くして、彼女の膣内の奥深くに肉棒を挿入していった。

「いやっ……んんんっ！」





ズパン

オークの肉棒は容赦なくえりなを責めたてた。
「んんっ！深いイーん！おっ、おっ、おっ、んんっっ」
ギョギョ

度重なる人や触手との性交で、

えりなの身体はすっかり快楽を素直に感じるようになってしまっていた。

「オマエハハイイ、女ダ。オデ達ニ族ノ、子供ヲ孕ンデモラウゾ！」

オークはぶひぶひと鼻を鳴らしながらニ心不乱に腰を振る。

「んあっ！あっ！あっ！そんなっ！ああん！奥っ、奥……！子宮に当たって！」



オークは休むことなく、むしろより一層激しく彼女を犯した。

「お……おっおっ……すす……すす……いい♡ 化け物のオチンチンで、私が、私があ♡」
「フヒッ、フヒッ……淫乱ナ女タ！ オデ達ノ嫁ニ相応シイ！」

「んんああ！ この私が！ この私が！ この私が化け物のお嫁さんなんてええ♡ あっ！ あんっ、ああっ！」
どこか嬉しそうな、満たされたような笑みを浮かべるえりなの視界に、もう二匹のオークが映る。

「ああんっ♡ だーめっ♡ 順番よ、順番♡」



現れたオークはえりなの口の中へ容赦なく肉棒を突っ込んだ。

「んぐう？！んっ！んっ！んん！んん！っ！」

パン

パン

ズツ

パン

あまりにひどい臭いと味に思わず彼女は顔をしかめた。

（神の舌を持つと言われるこの私が、

こんな醜い化け物のオチンチンを口にいれるなんて!!）

「んぐっ！んんっ！んん！んん！」

「オマエハ黙ッテオデ達に奉仕スレバイインダ！」

「いやっ、息ができない……！苦しい……！嫌なのに……！嫌なはずなのに、私すごく感じちゃってる……！」

パン

(化け物のオチンチン……臭くて、汚くて、苦くて……
なのにどうしてこんなに、そそられるの……?)

「アヒヒッ! コノ女、自分カラ舌ヲ絡マセテクルゾ!」
「コンナ淫乱ナ女ハ見タコトガナイ!」

パン

ズツ

ズツ

ズツ

——じゅぽ、ちゆる、ちゅぱっ、じゅるっ

しどどに濡れたえりなの膣壺と、肉棒を咥える口から淫猥な音が響き渡る。

パン

パン

「アヒヒ、中ニ出シテヤル! オデノ子ヲ孕メ!」
「アヒヒッ! コツチモ、出スゾ!」

「んんっ! んんぐっ! んんん!」



—びゆる—びゆるる—びゅ—びゅつ—

「ん

っ—!

ビュル
ビュル

ギョッ
ギョッ

ドグツ
ドグツ

オークたちはえりなの膣壺、口内の奥深くで二斉に射精した。

(ああ……また中に出されて……♡ 化け物の精液、

こんなに不味いのに癖になっちゃいそう……♡)

どく
どく
んん

ギョッ

「ブヒッ！オマエハズットコロコデ飼ッテヤル！」

「オデ達ノ子ヲ確實ニ孕ムマデ永遠ニ犯シ続ケテヤル！」

(ああ……もう料理なんてどうでもいい……)

「……ですつと気持ちいいことしてもらえるのなら、そのほうがずっと幸せだわ……」

数ヶ月

「ほらあ♡私の美味しいミルクが飲みたいならもつと頑張りなさい♡」

自分の腹から生まれ出たオークの子に、四つん這いになり尻を向けたえりなの姿があった。
「ちゃんと私を孕ませられたらたっくさん美味しいミルク飲ませてあげるわ……」

数か月ですっかりだらしない身体になってしまったえりなだったが、

本人はそんなことを気にしている様子は二切ない。

子供のオークは母親であるえりなに背後から抱き付き、

堅くそそり立った肉棒を突き入れた。

「ああん！そう、そごよ♡さあ、腰を振って私の中にたくさん注ぎ込みなさい♡」





ズパン

「んっ！あっ♡あっ！いいっ！もっと、奥まで！ああん！気持ちいい♡」
子供のオークは鼻息を荒くして夢中で母親の膣内を突き、胸を揉んだ。

「あんっ！パパに似て激しいっ！その調子よ、もっと激しく突いてえ♡♡♡」
息子であるオークに優しい声で煽るえりな。
学園にいた頃の涼々しいお嬢様は、既にそこにはいない。

あっ♡
あっ

「あんっ！いいっ！気持ちいいわ♡」

パン

ズパン パン
パン

「んんんっ！そんなに激しく揉んだらおっぱい出ちゃう♡」
息子のオークはえりなの胸をより強く揉んだ。
本能が母乳を絞りだそうとそうさせたのだろうか、
えりなは愛おしそうに息子を見つめながら嬌声をあげた。

「んっ♡あっ♡ 出ちゃうーミルクでちゃうっっー！」
ピュッ、ピュッ、と彼女の乳首から母乳が絞りとりられる。

二度出ると止まらなくなってしまい、まるでオークの射精の「とく」母乳が噴出する。
「んんっ！ほら、おっぱいだけじゃなくて腰も振るのよ♡」

あっ

ピュッ

パン



母親を孕ませることで得られるミルクを実際に見て更に興奮したのか。

オークの動きはよりニ層激しくなる。

「んんっ！すごいいいー！まだ　なのに、こんなに激しいなんてっ♡」

「ブヒヒッ、サスガ、オデノ息子だー！！」

えりなを犯している子供の父親であるオークが満足そうに笑う。

「ふふっ、あなたに似て素敵よ♡この子はッ♡」

オークも絶頂が近いのか、

肉棒の先端が膨れ上がるのをえりなは感じた。

「んーっ♡イクのね？イキなさい！私のニ番奥に、
たくさん出してなさい♡ほら、出して出して♡」



「ん——っ♡ 私もいつちやう——
息子に犯されていつちやううううう——」

——ドクッ、ビュルルルッ——どびゅっ！びゆる！

オークの射精と共にえりなも絶頂を迎える。

まだ——とは思えないその射精量に、
えりなはここ最近で一番大きな嬌声をあげた。

ビュル
ビュル

グッ
グッ
グッ

「んっ！あんっ♡ おっぱいも止まらない！イクの止まらないのおおお！」
逆流した大量の精液が彼女の膣口からコポコポと零れ落ちる。

「自分の子供とのセックスも癖になっちゃう……♡」



「ふふっ……とても立派だったわよ……」

射精し終えた息子のオークを愛おしそうに撫でるえりな。

目の前に仁王立ちするオークに視線を向ければ、ニッコリと微笑んだ。

「あなた……この子は将来有望よ……♡」

ハア……

学園にいた頃の様子は見る影もなく、

幸せそうに淫らな笑みを浮かべて迷宮の奥底で今日も嬌声をあげる。

「神の舌」を持つ女王薙切えりなは、

このままオークに囲まれてその一生を過ごすのだった。

END